Medica 岡山医療 健康ガイド

地域生活を支える精神科医療

③ 生活の場で支える訪問医療体制

慈圭病院訪問看護室長 河合 絵利子

当院の訪問医療体制は、往診（当事者宅・関連施設）、訪問支援（当事者宅・共同住居・障害者施設・高齢者施設）、入院患者への退院前訪問で構成されています。

往診は、当事者の自主的な来院が難しい場合に緊急的に行われるものと、定期的に当事者宅や関連施設へ出向いて行うものとがあります。

訪問支援は、訪問看護室が行う（24時間の訪問サービスを含む）もの、デイケアの職員や精神保健福祉士が行うものがあります。近年、障害者グループホームや高齢者施設への訪問も増えており、当事者が新しい環境に慣れ、安心して楽しく生活できるように支援します。

かわい・えりこ 勝山高、国立岡山病院付属看護学校、岡山県公衆衛生看護学校を卒業後、1994年、保健師として慈圭病院に就職し精神科訪問看護に従事。2018年から訪問看護室室長。

服薬確認をするAさん（右）と職員

そのためには施設との連携が重要です。施設を訪問して当事者の話を聞き主観的な状態を把握します。施設職員の情報提供により客観的な状態を把握し、病状悪化の早期発見に努めます。不調時には早めの受診調整を行います。当事者は、自分の状態や要望を伝えることや相談が苦手な方も多く、施設職員とのコミュニケーションの橋渡しをすることもあります。

退院前訪問は、主治医と病棟職員で入院中の当事者宅を訪問します。生活の場を知ることは、疾病や障害が当事者の地域生活に与える影響について把握し、個別的な治療や支援方針を導きだすのに役立ちます。

＜1人暮らしのAさんの支援＞

訪問看護室より24時間の訪問サービスを利用しているAさんですが、支援を開始して今年で6年になります。1人暮らしの自宅へ週3回訪問しています。Aさんは「今は調子がいいけど、自分では調子が悪くなる原因が分からないから困る」とのことで、訪問スタッフによる精神状態の観察、服薬確認、生活状況の見守りが必要です。これらは保護要素となり、Aさんを守り、病の苦痛から救い出すことにつながります。

お墓に手を合わすAさん（職員撮影）

お盆にはお墓参りに同行しました。これはAさんの希望する社会生活が送れるように支援する促進要素となります。どちらもAさんの地域生活に必要です。

Aさんに訪問支援で助かることは何か問うと、「いろいろな所に連れて行ってくれ、相談に乗ってくれて助かるし、今の生活は楽しい」との答えが返ってきました。支援の保護要素と促進要素のバランスがとれている状態といえます。

当院ではこれらの訪問医療体制を当事者の状態に応じて組み合わせ、生活の場で支え続けています。

◇

慈圭病院（086－262－1191）